

## 教育講演

### 教育講演1 急性呼吸不全における肺理学療法の実際 司会者のサマリー

福島県立医科大学麻酔科学教室

田勢長一郎

演者の宮川哲夫氏は肺理学療法の分野では第1人者であるが、米国呼吸療法師の資格も取得され国際的に活躍なさっている方である。本邦においても、各学会で一般演題、シンポジウム、講演など多数発表され、論文も精力的に御執筆なされ、肺理学療法の重要性の普及に尽力をつくされている。肺理学療法は従来は大部分が慢性呼吸不全を対象として行われていた。しかしながら、宮川氏は慢性呼吸不全のみでなく急性呼吸不全に対しても積極的に肺理学療法を行えば、肺合併症の予防および治療に対する効果が期待でき、さらに、人工呼吸器からの早期離脱の可能性も示唆している。今回の教育講演でも、種々の文献ならびに御自身のデータを示しての肺理学療法の効果について説明され、非常に納得させるものであった。また、我々が急性呼吸不全患者に対し日常的に行っている排痰法の一つとしてのバーカッションの問題点も挙げられた。気管支攣縮などの副作用も多く、急性呼吸不全に対してのバーカッションを行うべきでないことを初めて知り、知識のなさを痛感した。肺理学療法の実際を、御自身がなされているスライドも多く提示された。聞くところによれば、氏の手指の動きは芸術的であるとも賞されており、スライドでは実際の動きがわからないのが残念であった。

本教育講演では、人工呼吸管理中の肺理学療法の重要性を強調され、会員も十分納得したと思われる。しかしながら、肺理学療法の効果を学問的に大系付け、さらに普遍的なものにする必要があり、今後の宮川氏の努力に期待したい。さらに、我々人工呼吸管理を日常行っている集中治療室の従事者も、積極的に肺理学療法を取り入れ、その効果をデータとして示す責任がある。肺理学療法なくして人工呼吸管理はありえないという概念を示唆する非常に有意義な教育講演であった。